

その上の8寸位のを“高ずは”と称し、この三者を“すば”と言ひ、末だに角叉の生じないものであるという。長さからすれば“長ずは”であるが南信州ではそこまで細かい区別はないようであつて、その実体は“すば”即ち“そろっぼ”といふことが出来る。

すなわち、南信州で“そろっぼ”と呼ばれるものは紀州熊野へんで“すば”といわれるものと同意語で、“すば”の一種“じろっぼ”なる呼名が伝つたものであろう。B・Cの両標本は奇形的と考えられるが、いずれにしても特に変わったものではなく、年令でせいぜい4~5才までの、角叉のない若い日本鹿であらうと考える。

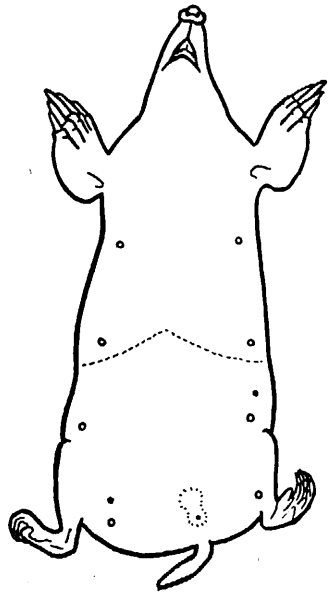
参考文献

川瀬淳太郎, 1926: 志か, 88~105. / 黒田長礼, 1940: 原色日本哺乳類図説 / 今泉吉典, 1948: 分類と生態日本哺乳動物図説.

モグラの副乳頭

土屋公幸・臼杵秀昭*

Kimiyuki TSUCHIYA and Hideaki USUKI: An abnormal record of mammal formula of a Japanese mole



1965年5月、新潟県加茂市において、過剰な乳頭をもったコウベモグラ *Mogera kobae* と思われる大型のモグラの雌 M. 10806 (頭胴 167.0 mm, 頭骨全長 41.0) が採集された。各乳頭の位置は図の通りで、右側は P.2+A.1+I.2, 左側は P.2+A.2+I.1 の合計10個の乳頭を有していた。副乳頭は、図では黒点で示してあるが、正常位にある乳頭に較べてやや小さい。一般にモグラの乳頭式は $2+1+1=8$ または $1+2+1=8$ (今泉, 1949, '60) であるが、今泉 (1949) は片側に5個あるものを観察している。

終りに、この標本を採集し寄贈された坪谷富男氏に心から感謝の意を表する。

文献

今泉吉典, 1949: 分類と生態日本哺乳動物図説, 58. / ———, 1960: 原色日本哺乳動物図鑑, 48~57.

* 長岡市立科学博物館

クロサイの交尾と妊娠期間の一例

関 公 一

Kin-ichi SEKI: Notes on an example of copulation and period of pregnancy of *Diceros bicornis*

神戸王子動物園のクロサイ *Diceros bicornis* が1965年11月2日朝、第二回目の出産をした。幸、私は交尾も観察しているので、交尾の状況と出産までに要した日数を以下簡単に報告する。

1964年7月30日、私が神戸王子動物園のクロサイ放飼場に行ったのは午後2時半であった。♂♀は1963年11月16日に第一回目の出産により生れた仔(♂)と共に三頭ならんで木蔭に横になっていたが、よく見ると♀の性器に発情らしい徴候が見られた。それから間もなく状況変化の気配を感じた私は振り返ると♀の背に乗りかかっていた。♂の努力にもかかわらず、両者の体の間隔が接近しすぎ、♀の陰茎を♀の性器にもって行けず、♂の長大な陰茎は♀

の後肢間を通過してしまふ有様で、しばらく♂は努力したが、一旦♀の背からおりた。♀が歩くと♂はそのあとを追う。そして両者は木蔭で少し休んでのち、♂は再び♀の背に乗って行った。しかし、♀の努力にもかかわらず、やはり両者間の距離の測定が拙く、一向に成功しない。二度目の失敗である。♂は再び♀の背をおり木蔭で両者一休みののち、三度目の試みに入



交尾中のクロサイ

1964年7月30日、神戸王子動物園にて筆者撮影

った。交尾が一向成功しないので♀は興奮の余りか、たびたび尿をもらし、それが♂の長大な陰茎をぬらした。♂は努力をつづける。この三度目の試みでは♂は一、二度目のときのように比較的簡単に♀の背をおりず努力をつづけている。♀は交尾の成功を待ち遠しげにキュー、キューと鳴く。やがて♂は体をうしろにずらし両者の距離を開いて試みると、ようやく両者の性器は結合、交尾が成功した。この間、交尾動作開始より成功までに約30分間を要した。結合はそのままつづけられ、その間♂の姿勢に両者の密着を維持するための多少の変化が見られた。結合後約30分間日に♂は腰部を小刻にふる

させた。すると之に応ずるかのように♀はキュー、キューと鳴いた。このときが♂の射精と思われる。そして数分間のうち、両者は離れた。離れた瞬間、♂の約 90 cm もあろうと思われる陰茎は約 15 cm に縮小し、♀の性器から液体が流出した。かくて結合後約 40 分間に及ぶ交尾は終わったのである。

以上の交尾は完全な成功で♀は完全に受精したものと思われる。いわゆる有蹄類の交尾は、種により射精に到るため交尾をたびたび繰返すものもあるが、一旦射精を伴う交尾に到った場合、通常受精の完成を意味すると思うので、今回の例では、1964 年 7 月 30 日から 1965 年 11 月 2 日までを妊娠期間とすべきであろう。即ち、日本において、飼育下におけるクロサイの妊娠期間の一例として、それは、461 日間であったことを報告する次第である。なお、交尾に際しての Display 及び Courtsip は♀♂共に全く示さなかった。

〔附記〕山本鎮郎は「どうぶつと動物園」Vol. 17, No. 9, p. 21 (1965) に「昭和 39 年(即ち 1964) 8 月 30 日、最終交尾確認」と記しているが、之は私が書いた同誌 Vol. 16, No. 11, p. 22 (1964) の短報の日附を誤記したものと思われる。なぜなら、私は 1964 年 7 月 30 日の観察後も王子動物園へは数回行っており、たまたま山本の記した 8 月 30 日にも行っているが、性行動の徴候は全く見られなかったからである。

尚 7 月 30 日の交尾成功の日に、之を見ていたのは、私のほかに遊覧客と思われる男子二人のみで、動物園関係者は誰も見ていなかったと思う旨をここに附記する。

貴学会のご発展をお祈りします

高校生物教科書なら大日本

東京都中央区銀座 1-5

大日本図書株式会社

岡田	田	要
木下	治	雄
佐藤	重	平
柳田	為	正
碓井	益	雄
八巻	敏	雄

雑報

キツネの仔を拾得 1965 年 6 月 6 日、山梨県東山梨郡牧丘町柳平金峰開拓農村(海拔 1,500 m)において新鮮なキツネの仔の死体(雄)を拾得した。毛色は成獣にほぼ等しい黄土色。測定値は次の通り(単位 mm)。頭胴長(毛皮)432, 尾長(毛皮)98, 頭骨全長 94.9, 頬骨部幅 56.5 (渡辺絏雄)。

利尻島のシマリス 1965 年 7 月 2 日(晴), 利尻山鴉泊登山道の海拔 300~400 m 付近のアカトドマツ・チンマザサ帯においてシマリス *Tamias sibiricus* subsp. を目撃した。午前 10 時から 11 時までの約 1 時間に 3 人で目撃した総数は 6 頭で、このうちの 2 頭は交尾中であつた(今泉吉典, 吉行瑞子, 小原巖)。

屋根裏で発見されたタヌキの死体 埼玉県秩父市寺尾秩父札所の音楽寺の観音堂を修理中、屋根裏で動物の古い死体が発見され 1965 年 5 月 7 日鑑定を求められた。持参された頭骨は明らかにタヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* の成獣で頭骨全長は 113.7 mm あつた。この屋根裏には数十年来誰一人登つたものがないので、明らかにタヌキがすみついて死んだものと考えられる。なおこの寺の付近には今日でもイタチ、リスが時々見られるという(今泉吉典)。

船橋市内のイタチ 1965 年 10 月 15 日午後 11 時頃、千葉県船橋市の成田街道でイタチの♀の死体を拾得した。拾つた時はまだ暖かく、自動車事故と思われ、解剖でも右下腹部に大出血が見られた。この付近では私はここ 20 年イタチを見たことがなく県下第 2 位の交通量のアスファルト道路でしかも周囲は人家ばかりである(坂井 治)。

ライトラップに入ったシマヘビ 1965 年 7 月 25 日、蔵王ドック沼付近で小哺乳類採集中に長さ 16 cm 幅 5.3 cm, 入口 5×6 cm の生け捕り用アルミニウム製トラップに長さ約 50 cm のシマヘビが入って出られなくなつていた(今泉吉典)。

大台・大峰の野獣目撃記録 紀伊半島中部の大台ヶ原・大峰山系はわが国には稀な野獣の楽園で、筆者は入山の都度、白昼にも拘らず次のとおり野獣を目撃した。

キュウシュウノウサギ: 弥山, 21 vii 1958, A.M. 9.24 (小雨), Alt. 1820 m, 1 頭, 弥山小屋の前へ出現。

ニホンツキノワグマ: 大台ヶ原山秀ヶ岳, 22 vi 1956, A.M. 8.20 (晴), Alt. 1650 m, 1 頭, 前方 10 m 内外の処を駆け過ぎたが月の輪は不確認。

ニホンアナグマ: 弥山, 21 vi 1957, P.M. 2.45 (曇), Alt. 1800 m, 1 頭, 近視眼的態度で彼我の間隔 4 m 程度にまで歩み寄つて来たが反転し去る。本種の垂直分布の最高の 1 例であろう。

ホンシュウジカ: 大台ヶ原牛石ヶ原, 22 vi 1956, A.M. 10.30 (晴), Alt. 1560 m, 1 ♀, イトザサの叢中に佇む。上空にはイスワシの飛翔が見られた。: 大台ヶ原山大蛇ぐら口, 21 vi 1958, P.M. 1.22 (曇), Alt. 1,500 m, 1 ♀, 叢林中を駆ける。: 大台ヶ